

研究ノート

不在先行詞と変形論的アプローチ

清 水 真 一

§ 0. Grinder-Postal (1971) (以下 G&P と略す) の不在先行詞 (missing antecedent. 以下 MA と略す) の議論によれば, MA の現象を呈示する文の派生に係わるのは統語的削除変形 (syntactic deletion) である。

以下, G & P の MA の議論が規則——とくに空所化変形——の順序づけ (ordering of rules) の点から, 果して十分なものであるか否かを検討し, 変形論的アプローチの問題点を指摘する。

§ 1-1. 以下, 意味の同一性にもとづく照応語 (identity of sense anaphora. 以下 ISA と略す) のうちゼロの照応語 (null anaphora)⁽¹⁾——動詞句の省略と中略——のみを扱うことにする。

G&P の変形論的アプローチにしたがうと, ゼロの照応語は削除規則によって説明される。まず基底部 (base) で先行詞と同じ構成素 ('full constituent') が生成され, 削除規則が派生のある段階でその構成素を削除する。したがって, 表層構造にあらわれるゼロの照応語はその派生の段階までは派生句構造の中に先祖 (ancestor) をもっていることになる。G & P は概略このような仮定のもとで MA の現象を呈示する例を説明できるとする。

まず, MA の現象をみてみよう。次の例をみよ。

- (1) Harrison didn't marry a nurse but Bill did. marry *a nurse* and how he regrets having married *her*.

(1)において, *her* は斜字体の *a nurse* を先行詞としている。この場合, その

先行詞が表層にあらわれているので、表層的な(1)の構造から、その *her* の先行詞を決定できる。しかし、(1)と同じ意味をもつ(2)では事態は異なる。

- (2) Harrison didn't marry a nurse but Bill did _____ and how he regrets having married *her*.

(2)では代名詞 *her* の先行詞は表層にあらわれていないので、表層的な(2)からだけでは、その先行詞を決定することはできない。その先行詞は——の「中」にある。このような先行詞を MA とよぶ。このことから英語にはその先行詞それ自体が ISA の「中」に存在するような照応語（たとえば、(2)の *her*）が存在することがわかる。

次の例をみよ。

- (3) My uncle didn't buy anything for Christmas, but my aunt did, and *it* was bright red.

(3)における *it* は *something my aunt bought for Christmas* の意味をもつものと解釈される。表層的にはその先行詞は不在である。その先行詞は第1番目の節の中にも存在しないし、また *my aunt did* にも存在しない。*it* の先行詞が第1番目の節の中に存在しないということは次の統語的証拠から明らかである。

- (4) *My uncle didn't buy anything for Christmas, and it was bright red. [*it*=something]

it が不定名詞 (indefinite noun) の *something* であると解釈され得ないという意味で(4)は非文である。そこで G&P の説明の仕方では(3)における MA は

その派生のある段階までは存在していたはずである。(3)の基底構造は概略(5)のような構造である。

- (5) My uncle didn't buy anything for Christmas, but my aunt did
[buy something for Christmas], and it was bright red.
[it=something]

(5)では、代名詞 *it* はその先行詞として第2番目の節の動詞句の中の *something* をもつことがわかる。構造上の同一性と意味の同一性にもとづいて、第2番目の節の動詞句は動詞句削除規則 (verb phrase deletion. 以下 VPD と略す) によって削除される。その結果(6)を得る。

- (6) My uncle didn't buy anything for Christmas, but my aunt did,
and *it* was bright red. [it=something]

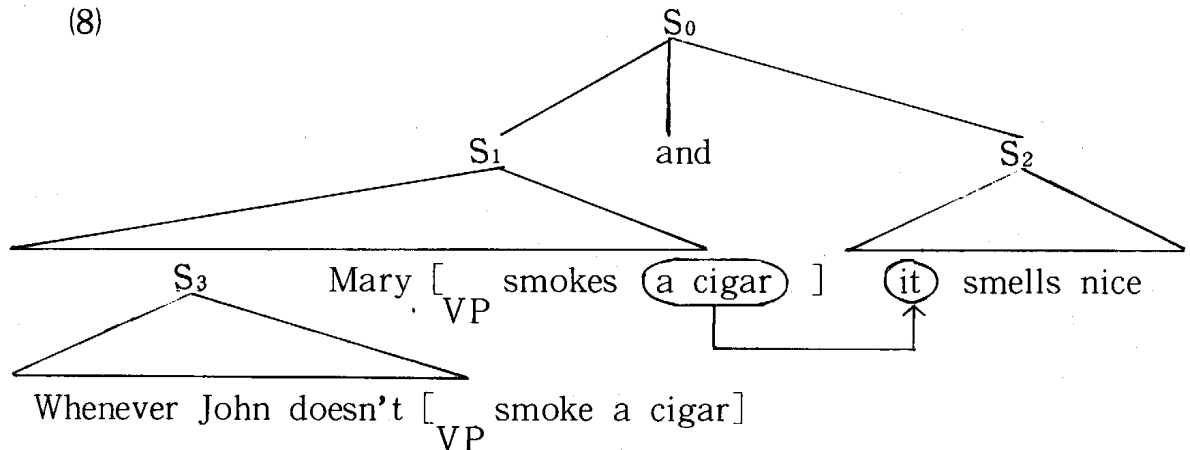
基底部で生成された、先行詞と同じ構成素 ((5)では第2番目の節の VP) が派生のある段階まで派生句構造の中に存在していて、途中で統語規則である VPD が適用されて、その結果(6)が派生されるとすれば、(6)の *it* と MA との関係 (なぜ(6)で代名詞化された *it* があらわれたのか) が説明できる。こうして、G&Pの枠組みでは、(3)のような MA の現象は VPD という統語規則によって説明される。

§ 1 — 2. ゼロの照応語について、G&P は変形論的アプローチを採っていることを見たわけであるが、VPD の適用に原因して MA の現象が生じた場合における不在先行詞と照応語の関係についての彼らの説明には、暗黙のうちにその照応関係を説明するメカニズム、即ち代名詞化 (pronominalization) が VPD よりも先に適用されるという前提があるように思われる。

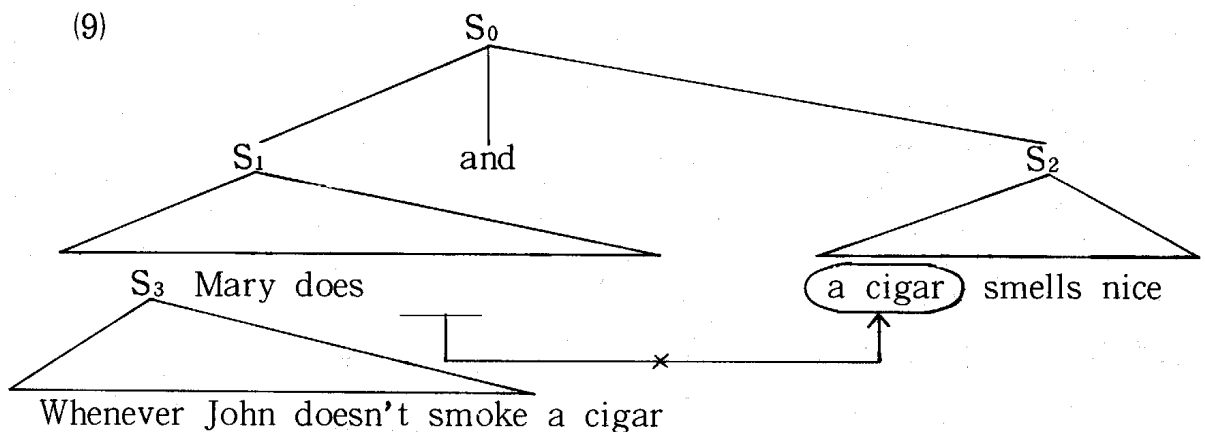
次の例をみよ。

- (7) Whenever John doesn't smoke a cigar, Mary does, and it smells smells nice.

G&P にならって(7)の派生を考えてみよう。(8)が概略 VPD 適用前の構造である。



①の先行詞は「a cigar」である。代名詞化は前循環規則 (pre-cyclic rule) ではなく循環規則 (cyclic rule) でもないので⁽²⁾、後循環 (post-cyclic) ないしは最終循環 (last-cyclic) 規則であると考えられる。したがって代名詞化が適用されるサイクルは S₀ サイクルである。S₀ サイクルで代名詞化は VPD よりも先に適用されなければならない。したがって VPD は前循環規則でなく、循環規則でもないことになる。仮に S₀ サイクル以前のサイクルで (したがって代名詞より先に) VPD が適用されると、(9)のように S₀ サイクルに至って代名詞化の適用が不可になる。



よって G&P では代名詞化も VPD も後循環ないしは最終循環規則で、代名詞化は VPD よりも先に適用されなければならないという仮定が存在していることになる。

§ 1－3. 前節で VPD は後循環ないしは最終循環規則で、代名詞化より後に適用されなければならないことをみたが、果してそうであろうか。Wasow(1979) は MA 現象を呈示する例への G&P の変形論的アプローチの問題点を指摘している。それは第 1 に、そう入禁止 (insertion prohibition) ないしは規則の厳密循環適用の条件 (strict cycle condition. 以下 SCC と略す) に、そして第 2 に、not 縮約規則 (not-contraction) との規則の順序づけにもとづく議論である。以下彼の議論を概観する。

§ 1－3－1. 次の例をみよ。

(10) John plays tennis whenever Mary does.

(10)の基底構造は概略 (11 a)。

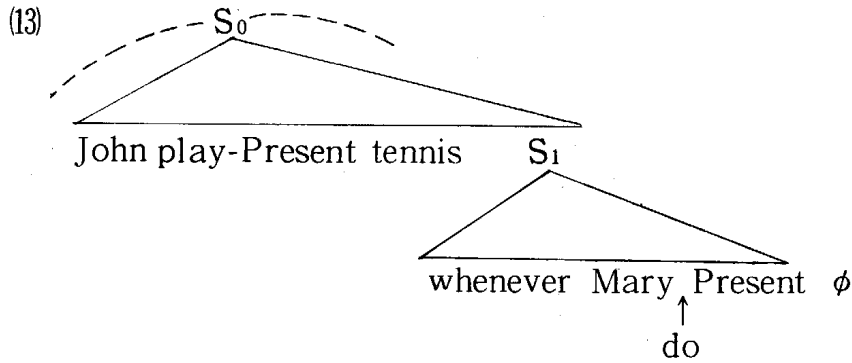
- (11) a. John Present play tennis whenever Mary Present play tennis.
b. John Present play tennis whenever Mary *Present*.

(11 a) に VPD が適用され、(11 b) を得る。うめ込まれた S の懸垂 Tense の *Present* に do によるささえ (do-support) が適用されて do がそう入される。しかしこの do によるささえはそう入禁止に違反する。そう入禁止は(12)に述べるような条件である。

- (12) 変形規則の循環適用がすべて完了している S に支配されている形 (configuration)の中にはいかなる形態的材料(morphological material)も導入することはできない。(Chomsky. 1973)

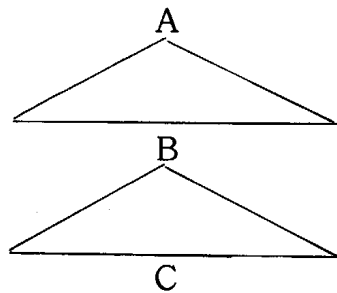
doによるささえは、S₀サイクルで VPD が適用されたあと、同サイクルで変形

規則の循環適用がすべて完了している S_1 に do をそう入するので、(12)に違反している。(13)参照。



さらに(12)よりもっと厳しい SCC (14) にも違反する。

(14) 循環範ちゅう B によって支配されている、循環範ちゅう A の部分下位



領域 C にだけ影響を与えるようなやり方で、A のサイクルにおける変形を適用することはできない。⁽³⁾ (左図参照)。

したがって do によるささえは後循環ないしは最終循環規則であてはならない。次の例をみよ。

(15) [S_0 John says [S_1 that you don't like turtles].]

Bresnan (1971a)によると not 縮約規則は各サイクルの一番あとで適用される規則である。Bresnan が正しいとすれば、そう入された do が not 縮約規則の適用前に S_1 サイクルにおいて存在していなければならない。したがって do によるささえは後循環あるいは最終循環規則ではあり得ない。

以上の2つの点から do によるささえは後循環あるいは最終循環規則ではないといえる。do によるささえは(10)の派生でみたとうり VPD の適用後にその適用環境が与えられるので、VPD の適用は do によるささえの適用よりも先でなければならない。したがって無理でも VPD は後循環ないしは最終循環規則ではないとしなければならなくなる。

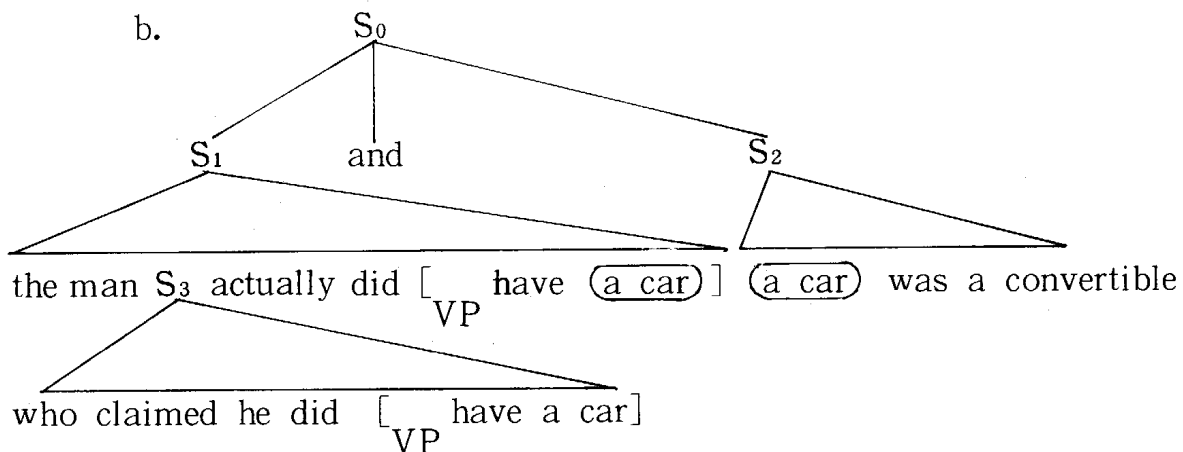
次の例から VPD は前循環規則ではありえないことがわかる。

- (16) John hoped that he would be arrested by the police,
but $\left\{ \begin{array}{l} \text{he wasn't} \\ \text{*they didn't} \end{array} \right\}.$

(16)のコントラストを説明するには受身変形 (passivization) の適用は VPD の適用に先立たなければならない。しかるに受身変形は循環規則であるから、VPD は前循環規則ではないことになる。VPD は後循環あるいは最終循環規則でなく、前循環規則でもないので、したがって循環規則でなければならない。

そこで次の例をみよ。

- (17) a. The man who claimed he didn't have a car actually did,
and it was a convertible.



(17 b) は概略 (17 a) の基底構造。VPD は循環規則であるので、S₁のサイクルで VPD が適用されて、S₁の VP は削除される。そして S₀ サイクルに至ったとき、S₂の (a car) を代名詞化することはできない。なぜなら、先行詞である S₁の VP の中の (a car) はすでに削除されて、不在になってしまっているからである。したがって (17 a) の派生は得られず、G & P の枠組みでは

説明できない。

§ 1-3-2. 以上の Wasow の批判は十分なものではない。彼自身も述べてるように、そう入禁止あるいは SCC を認めるかぎり、(10) は説明不可能である。VPD が後循環ないしは最終循環規則であっても、あるいは循環規則であっても、do によるささえは結局 SCC を違反しなければならない。よって (10) の派生を得る他の工夫なしに、VPD を一方的に後循環あるいは最終循環規則ではないとし、結局、VPD が循環規則であるという仮定のもとに、VPD に原因する MA の現象の説明が G&P ではできないと断言することはできない。しかし、SCC を認めるかぎり、(10) のような例を変形論的アプローチでは説明できないことは以上みたかぎりでは明白である⁽⁴⁾。この点は G&P にとって大きな問題点であることに変わりない。

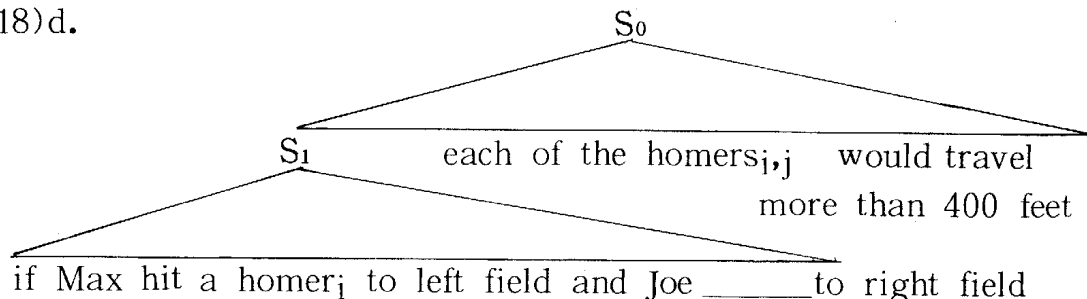
§ 2. 我々は § 1 で VPD の場合を Wasow の問題指摘に沿って概観したわけであるが、この節では空所化変形 (gapping) をたてることにより、次のような MA の現象を呈示する例を G&P の枠組みで説明できるか否かを考えてみることにする。

- (18) a. If Max hit a homer_i to left field, it_i would travel more than 400 feet.
- b. [[If Max hit a homer_i to left field and Joe hit a homer_j to right field], each of them_{i,j} would travel more than 400 feet]
 $S_0 \quad S_1$
- c. [[If Max hit a homer to left field and Joe to right field], each of them would travel more than 400 feet]
 $S_0 \quad S_r$

G&P の線に沿って、Postal (1972) では (18 c) を変形論的アプローチで説明することになる。したがって (18 b) の如く、一番上の S_0 で代名詞化が空所化変形より先に適用されていなければならない。一番上の S_0 より下の S_1 で空

所化変形が適用されると、(18 d)にみるようにその分離先行詞 (split antecedents) の一つ *a homer_j* が削除されてしまうため、代名詞化の適用環境が得られなくなってしまう。

(18)d.



代名詞化は後循環ないしは最終循環規則であるから、したがって、(18 c)を説明するためには、Postal では空所化変形も後循環ないしは最終循環規則でなければならないことになる。

§ 2-1. そこで以下、空所化変形が循環規則でありうるかどうかを調べるために、(i) 空所化変形は前循環規則ではない、(ii) 空所化変形は後循環あるいは最終循環規則ではないということを順に調べてみることにする。その結果(i)と(ii)がともに正しいとするなら、空所化変形は循環規則ということになる。

§ 2-1-1. 空所化変形は前循環規則ではない。

次の例をみよ。

- (19) a. John hit Mary and Bill hit Sue.
 b. John hit Mary and Bill Sue.
 c. Mary was hit by John and Sue was hit by Bill.
 d. Mary was hit by John and Sue by Bill.
 e. *Mary was hit by John and Bill Sue.
 f. *John hit Mary and Sue by Bill.

まず空所化変形が受身変形よりも先に適用されると仮定しよう。(19 a)の基底構造は概略 (20 a)。

- (20) a. $\left[\begin{array}{c} \text{John Past hit Mary} \\ S_0 \ S_1 \end{array} \right] \text{ and } \left[\begin{array}{c} \text{Bill Past hit Sue} \\ S_2 \end{array} \right]$

(20 a) に空所化変形が適用されると, (20 b) を得る。

- (20) b. $\left[\begin{array}{c} \text{John Past hit Mary} \\ S_0 \ S_1 \end{array} \right] \text{ and } \left[\begin{array}{c} \text{Bill Sue} \\ S_2 \end{array} \right]$

表層に至って (19 b) を得る。しかし (20 b) の S_1 に受身変形が適用されると (20 c) を得る。

- (20) c. $\left[\begin{array}{c} \text{Mary Past be-en hit by John} \\ S_0 \ S_1 \end{array} \right] \text{ and } \left[\begin{array}{c} \text{Bill Sue} \\ S_2 \end{array} \right]$

そして, 表層に至って $^{(5)}$ *(19 e) が派生されてしまう。又 (20 b) の S_2 は受身変形の構造記述にあわないので (19 b) は得られない。一方, 受身変形が空所化変形よりも先に適用されると仮定しよう。(20 a) の S_2 , S_1 で受身変形が適用されずに, S_0 で空所化変形が適用されれば (20 b) を得る。表層に至って (19 b) を得る。(20 a) の S_2 , S_1 にそれぞれその順に受身変形が適用されると, (21 a) を得る。

- (21) a. $\left[\begin{array}{c} \text{Mary Past be-en by John} \\ S_0 \ S_1 \end{array} \right] \text{ and } \left[\begin{array}{c} \text{Sue Past be-en hit} \\ S_2 \\ \text{by Bill} \end{array} \right]$

S_0 で空所化変形が適用されずに表層に至ると (19 c) が得られる。 S_0 で空所化変形が適用され表層に至ると (19 d) が得られる。(20 a) の S_1 にのみ受身変形が適用されると (21 b) を得る。(21 b) の S_0 では空所化変形は適用され得ない。

- (21) b. $\left[\begin{array}{c} \text{Mary Past be-en hit by John} \\ S_2 \ S_1 \end{array} \right] \text{ and } \left[\begin{array}{c} \text{Bill Past hit Sue} \\ S_2 \end{array} \right]$

なぜなら、S₂, S₁ではそれぞれ *Past hit*, *Past be-en hit* で、構造上の同一性を得られないからである。よって *(19 e.) のような非文は派生されない。*(19 f.) についても同様の理由でその派生は阻止される。以上より受身変形が空所化変形よりも先に適用されるという仮定が選択される。受身変形は循環規則なので、したがって空所化変形は前循環規則とは考えられない。

§ 2-1-2. 次に空所化変形が後循環ないしは最終循環規則ではないのかどうか考える。

まず空所化変形は少なくとも Tense+V を削除する。

次の例をみよ。

- (22) a. Bill ate the peaches and Harry did, too.
d. *Bill ate the peaches and Harry did _____ the grapes.
c. Bill ate the peaches and Harry _____ the grapes.

VPD は Aux を残して動詞句を削除する。一方空所化変形は AUX をも削除してしまう。

次の例をみよ。

- (23) a. Bill eat the peaches or Harry the grapes?
b. *Did Bill eat the peaches or did Harry the grapes?
(24) a. Bill ate the peaches and Harry ate grapes.
b. *Bill ate the peaches and Harry did the grapes.

(Terazu 1975:31)

(23 a), (24 a) の基底構造は概略それぞれ (25 a), (25 b)。

- (25) a. Q Bill Past eat the peaches or Q Harry Past eat the grapes.

- b. Bill Past eat the peaches and Harry Past eat the grapes.

(25 a), (25 b) においてそれぞれ Tense+V を削除することによって *(23b), *(24 b) を排除することができる。

つぎに空所化変形は随所規則 (anywhere rule) であってはならない。空所化変形、主語・助動詞倒置 (subject-aux inversion. 以下 SAI と略す), do によるささえの順で適用されなければならない。この適用順序でたとえば(23), のコントラストを説明できる。(23 a) の基底構造 (25 a) に空所化変形を適用すると (26 a) を得る。(26 a) に SAI が適用されて (26 b) を得る。

- (26) a. Q Bill Past eat the peaches, or Harry the grapes.
b. Past Bill eat the peaches, or Harry the grapes?
c. Did Bill eat the peaches, or Harry the grapes? (= (23a))

(26 b) に do によるささえを適用して (26 c) を得る。このように空所化変形, SAI, do によるささえの適用順序を仮定することによって *(23 b) を排除し, (23 a) の派生が得られる。

仮にその適用順序を SAI, do によるささえ, 空所化変形の順にすると, (23a) の基底構造 (25 a) に SAI が適用され, (27 a) に do によるささえが適用され (27 b) を得る。

- (27) a. Past Bill eat the peaches or Past Harry eat the grapes?
b. Did Bill eat the peaches or did Harry eat the grapes?
c. Did Bill eat the peaches or did Harry the grapes? (= (23b))

(27 b) に空所化変形が適用されて (27 c) が派生されてしまう。したがって *(23 b) を排除できない。空所化変形が随所規則でない例をもう一つみよう。

つぎの例をみよ。

- (28) a. I didn't eat fish, Bill didn't eat rice, and Harry didn't eat roast beef.
b. *I didn't eat fish, Bill rice, *and* Harry roast beef.

ところが一般に *and* の代りに *nor* があらわれると許容できる文がある。

(29) 参照。

- (29) Sam doesn't play sousaphone, *nor* Medusa sarrussophone.

そこで次のパラダイムをみよ。

- (30) a. *Max didn't eat fish and Tom rice.
b. *Max didn't eat fish and not Tom rice.
c. Max didn't eat fish nor Tom rice. (Terazu 1975:36)

(30 a) は *Max didn't eat fish and Tom didn't eat rice* の意味には解釈できない。このような構造を空所化した場合は復元不可能 (unrecoverable) である。このような事態を避るためには空所化変形を否定辞配置 (NEG-placement) の前に適用するように順序づけなければならない。概略 Jackendoff (1971) にもとづいて次のような過程を考えれば, *(30a) *(30b) を排除して, (30 c) を得ることができる。

- (31) a. NEG Max Past fish and NEG Tom Past eat rice.
↓ 空所化
b. NEG Max Past eat fish and NEG Tom rice.
↓ 否定辞配置
c. Max did not eat fish nor Tom rice. ⁽⁶⁾

- ↓ do によるささえ
- d. Max did not eat fish nor Tom rice.
- ↓ not 縮約
- e. Max didn't eat fish nor Tom rice.

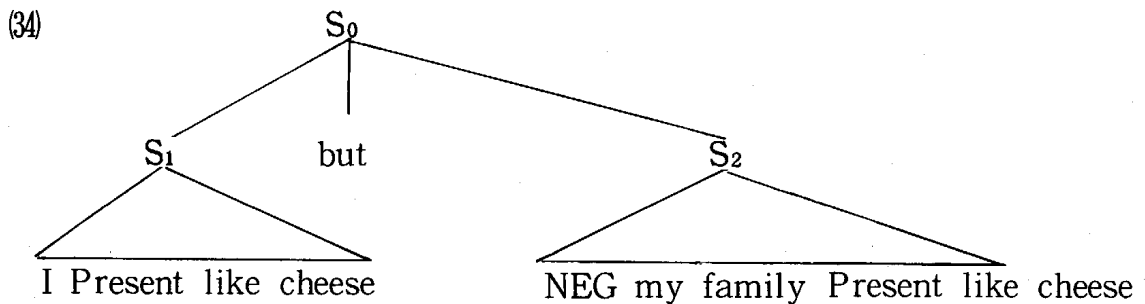
かくして (32) のような規則の適用順序が得られる。

(32) 空所化変形→否定辞配置→S A I→ do によるささえ→ not 縮約規則

§ 1—3—1 でみたように否定辞配置は後循環あるいは最終循環規則であってはならない。次の例で考えることにする。

(33) I like cheese, and my family doesn't like cheese.

(33) の基底構造の枝分れ図は概略 (34)。



Bresnan が正しいければ not 縮約規則は S₂ サイクルの一番終りに適用されなければならない。not 縮約規則の入力には *do not* が与えられていなければならないので、否定辞配置は後循環あるいは最終循環規則ではない。もし否定辞配置が後循環ないしは最終循環規則であるなら、(34) の S₀ サイクルで適用することになるから、S C C に違反せざるをえない。さらに do によるささえが適用される環境として (35) のような環境が考えられる。

(35) X \uparrow TENSE NEG Y
do

したがって do によるささえの適用前に否定辞配置が適用されていなければならない。否定辞配置が S_0 サイクルで適用される後循環ないしは最終循環規則であるならば, do によるささえも SCC に違反しなければならない。よって否定辞配置は後循環あるいは最終循環規則でない。とすると, (32) より空所化変形は否定辞配置より先に適用されなければならないのであるから, 前者も後者同様に後循環あるいは最終循環規則ではないことになる。

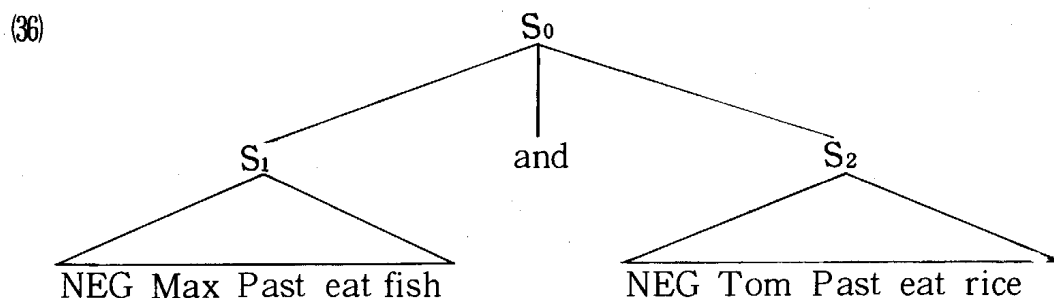
§ 2-1-3. § 2-1-1 における如く空所化変形は前循環規則でなく, また § 2-1-2 の如く後循環あるいは最終循環規則でもないので, 循環規則と考えざるを得ない。

空所化変形が以上のように循環規則であるなら, Postal の暗黙の仮定, すなわち, 代名詞化も空所化変形も後循環ないしは最終循環であり, 前者が後者よりも先に適用され, (18c) が説明できるのだという仮定が崩れ, Postal のように変形論的アプローチでは (18c) の派生は得られないことになる。(18d) 見直してみる。 S_1 サイクルで循環規則である空所化変形が適用され, *hit a homer_j* が削除される。 S_0 サイクルに至って代名詞化が適用されるときには, *the homers* の先行詞の一つ *a homer_j* が不在になってしまっているため, 代名詞化の適用は不可となり, (18c) の派生は得られない。

しかし, 空所化変形が循環的であると仮定すると, 実は多くの問題が生じる。空所化変形と否定辞配置とが循環的で, 前者が後者よりも先に適用されるという仮定のもとで, 再度 (30) のパラダイムをみなおすと, それを説明できないことがわかる。(30) を再度ここに引用する。

- (30) a. *Max didn't eat fish and Tom rice.
b. *Max didn't eat fish and not Tom rice.
c. Max didn't eat fish nor Tom rice.

(30c) の基底構造の枝分れ図は概略 (36)。



空所化変形は S_0 , S_1 サイクルでは適用不可。 S_2 , S_1 サイクルの順で、各々のサイクルに否定辞配置, do によるささえ, そして not 縮約が順次適用されて (37 a) が得られる。

(37) a. Max didn't eat fish and Tom didn't eat rice.

S_0 サイクルで空所化変形は適用可。適用の結果 (37 b) を得る。

(37) b. *Max didn't eat fish and Tom rice. (=*(30a))

したがって *(30a) が派生されてしまう。そこで *(30a) の派生を阻止するために、否定辞要素を含む連続は削除できないというその場かぎりの条件を空所化変形に課するとしても、結局 (30 c) はえられない。

そこで、否定辞配置を随意的 (optional) にしたとしても、やはり具合が悪い。SCC が働くものとして否定辞配置を随意的にすると次のような非文の派生を阻止できない。

(38) a. *Not Max ate fish nor Tom rice.

b. *Not Max ate fish and Tom didn't eat rice.

(36) を参照しながら議論をすすめることにする。(36) の S_2 , S_1 サイクルでそれぞれ否定辞配置が適用されないとする。 S_0 サイクルでは空所化変形は適用可。空所化変形適用の後、同サイクルで、 S_1 に否定辞配置は適用できない。

SCC に違反するからである。結果として *(38a) が派生されてしまう。つぎに *(38b) の派生を阻止できないことをみよう。(36b) の S_2 サイクルで否定辞配置が適用され、 S_1 サイクルでは空所化変形は適用不可。そして同サイクルで、 S_1 に否定辞配置も適用不可。SCC に違反するからである。結果として *(38b) が派生されてしまう。

このような結果は結局否定辞配置を循環的とみなしたことに原因がある。否定辞配置が循環的であれば、必ずそれは空所化変形より先に適用されることになる。なぜなら否定辞配置は単一の S で適用されるが、空所化変形は基本的に単一の S を 2 つ以上等位接続する構造に適用されるからである。したがって(30)の例にもとづいてたてられたところの空所化変形は否定辞配置よりも先に適用されるという規則の順序づけは、否定辞配置を循環的とみなすことによって意味がなくなる。つまり(30)のパラダイムを説明できなくなる。したがって規則の適用領域が単一の S に限定される *do* によるささえのような規則の場合もそれを循環的とみなすことによって(23)のようなコントラストを説明できない。

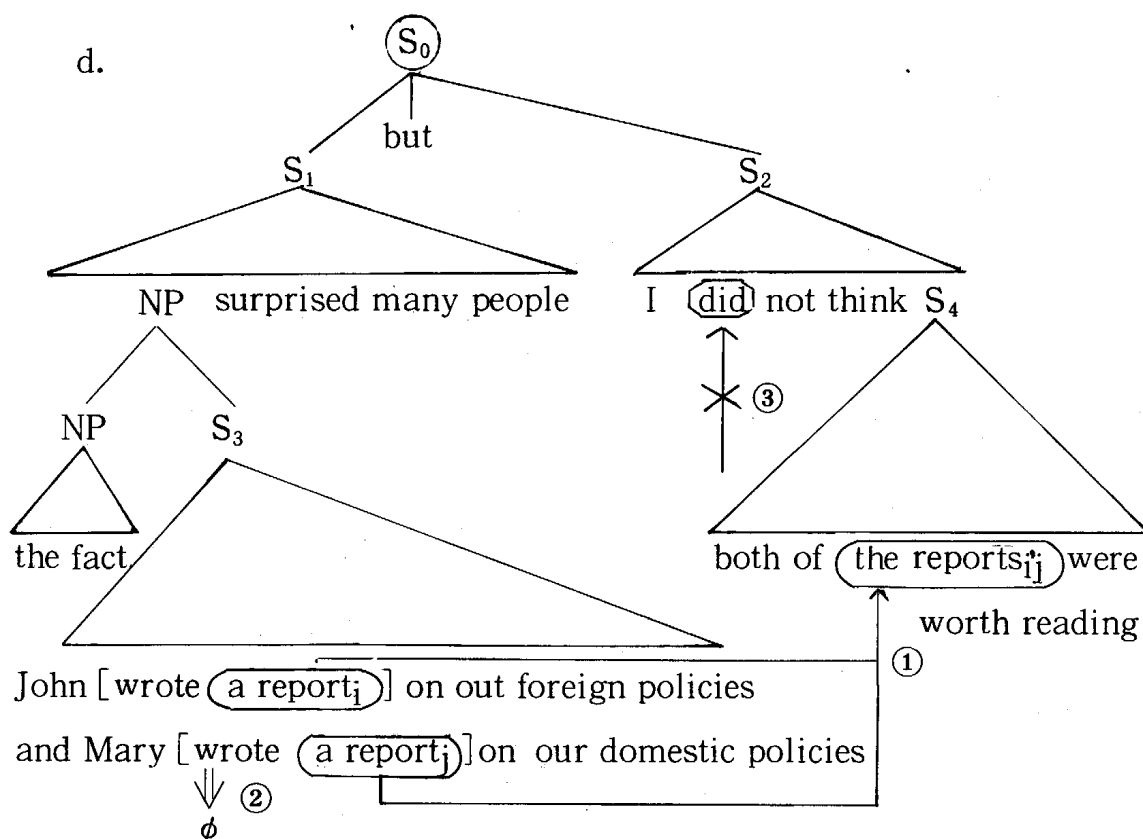
以上から、空所化変形を循環的であるとみなすのは無理である。したがって(18c)のような例は Postal の変形論的アプローチでは説明できないとはいえない。

しかし Postal のように空所化変形が後循環ないしは最後循環規則であり、代名詞化より後に適用されると仮定しても、(32)の順序づけを仮定するかぎりにおいては、(33)は説明できない。否定辞配置も *do* によるささえも SCC に違反するからである。そして SCC を認めるかぎりにおいては、次のような空所化変形の適用の結果と考えられる MA を呈示する例は説明できない。

- (39) a. The fact that John wrote a report_i on our foreign policies surprised many people, but I didn't think it_i was worth reading.

b. The fact that John wrote a report_i on our foreign policies and Mary wrote a report_j on our domestic policies surprised many people, but I didn't think both of them_{i,j} were worth reading.

c. The fact that John wrote a report on our foreign policies and Mary on our domestic policies surprised many people, but I didn't think both of them⁽⁷⁾ were worth reading.



(39.b) の基底構造は概略 (39 d)。 S_0 サイクルに至って先ず代名詞化が適用され (①), *them* を得る。次に空所化変形が適用されて *wrote a report_j* が削除される (②)。同 S_0 サイクルで S_2 に *do* がそう入されなければならないが, SCC に違反するので *do* によるささえは適用できない (③)。(8) によって (39 c) の派生は得られないことになる。

§ 3. ま と め

以上をまとめることにする。

- (40) 代名詞化は後循環ないしは最終循環規則である。
- (41) (32) の規則の順序づけを想定する。その順序づけられた空所化変形等の諸規則は循環的に適用される。
- (42) (32) の規則の順序づけを想定する。その順序づけられ空所化変形等の諸規則は後循環ないしは最終循環規則である。そして代名詞化の適用は空所化変形の適用に先立つ。

(18c) を説明するために、以上3つの仮定のうち Postal は(40)と(42)を暗黙のうちに仮定していることをみた。我々は彼の変形論的アプローチの枠の中で議論をすすめ、もし(42)でなく(41)の仮定が成り立つとすれば、Postal では(18c)の説明が出来ないことを示そうとした。しかし、(41)の仮定は正しい仮定ではなく⁽⁹⁾、したがって Postal の仮定では(18c)の説明ができないということを示し得なかった。しかし一方、Postal のように(40)と(42)とを仮定したとしても、SCC を認めるかぎりでは(39c)のような例が説明できない⁽¹⁰⁾。VPD という統語的削除変形をたてる変形論的アプローチに対する Wasow の問題指摘とあわせて、我々の以上みたかぎりでは、(40)と(42)とを仮定する変形論的アプローチでは(39c)の説明が困難であることをまとめとして指摘するにとどめる。

〔註〕

- (1) 有意味ではあるが、具体的な形で表現されていないことをゼロあるいはゼロ形態という。一応ここでは null anaphora をゼロの照応語と訳すことにする。

ISA はゼロであろうとなかろうと、その意味解釈が表層構造の他のある部分との意味的同一性にもとずいて決定される照応語である。たとえば次の例をみよ。

- (i) a. Harry insulted his wife and Bill did ϕ too
- b. Larry married a nurse who owned an iguana but Pete did not marry *one*.

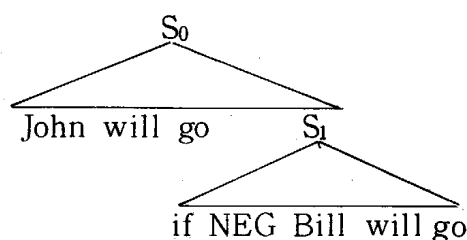
φの場合、その意味は表層構造の他のある部分、つまり第1節の動詞句 *insulted his wife* (ただし、この場合は *insulted Harry's wife / insulted Bill's wife* と2通りにあいまいである) と意味的に同一であると解釈される。*one* は表層構造の他のある部分 *a nurse who owned an iguana* と意味的に同一と解釈される。よってφも *one* も ISA に分類される。

- (2) Postal (1971), Lakoff, G. (1968) 参照。
- (3) すなわち派生がより大きな、もっと包括的な循環領域へ移ってしまった後では、その循環より以前の段階へ帰ることはできないということ。
- (4) VPD が後循環ないしは最終循環規則であっても、又循環規則であっても、SCC を認めるかぎり変形論的アプローチでは説明できない例として Wasow は次の例をあげている。

(i) John will go if not Bill.

(i) の基底構造は概略 (ii)。

(ii)



(3)にもとづく議論より、VPD→否定辞配置の順に規則が適用されるとしよう。ただし、両規則とも循環的とみなす。S₁ サイクルで否定辞配置が適用される。S₀ サイクルでは VPD は適用不可なので、*John will go if Bill won't go* のみしか得られない。そこで (i) を得るためには、否定辞配置を随意的にしなければならない。S₁ サイクルで否定配置が適用されない。S₀ サイクルで VPD が適用されて (i) を得る。しかし S₀ サイクルで VPD が適用されなければ、同サイクルで S₁ に否定辞配置が適用されなければならない。そうでないと、**John will go if not Bill will go* が派生されてしまう。しかし S₁ に否定辞配置を適用することはこの場合 SCC に違反するので適用不可である。VPD と否定辞配置が後循環ないしは最終循環規則であっても、同様に SCC に違反しなければならない。よって変形論的アプローチでは (i) の例は説明できないことになる。しかしこの議論は VPD が LIKE-AUX の条件に従うかぎりにおいて成り立つ議論であることに注意。

- (5) (20 b) の S₀ サイクルで S₁ に受身変形が適用することは SCC に違反するので、* (19 b) の派生は阻止できると言えるかもしれない (同様に、* (19 f) も SCC で阻止できる)。しかし今度は (19 c) の派生が得られなくなる。同様に (19 d) の派生も得られない。

- (6) ここでは $\text{and} + \text{not} \rightarrow \text{nor}$ のようなプロセスを想定し、義務的に適用されるものと仮定している。しかしこのプロセスには次のような問題点がある。第1に、*(30 b) と (30 c) のように $\text{and} + \text{not} \rightarrow \text{nor}$ は随意的であってはならない。しかし次の例をみよ。

- (i) a. John feels the individual is in debt to society *and not* society to the individual. (Terazu 1975:36fn)
 b. Mary supported John. (and) not John Mary.
 (Klima 1964:301)

(i) では *nor* があらわれていないのに許容される文である。第2に、意味的喪失 (semantic loss) なしで *nor* の代りに *or* があらわれる場合がある。つまり、*or* があらわれても左の節に否定要素が存在すれば、*or* が *nor* の意味に解釈できる場合がある。次の例を参照。

- (ii) a. Henry Red Allen wouldn't play the nose flute, *nor* Bach the kazoo.
 b. Richard won't eat hummous *or* P.D. anything with coriander in it, but other than that it probably won't be too hard to plan the dinner. (Stillings 1975:257fn)

(ii) より *or* の場合、 $\text{or} + \text{not} \rightarrow \text{nor}$ というプロセスは義務的なものではない。第3に、つぎのような不都合が生じる。(iia) のような例がある。(iia) における *and nor* のあらわれを $\text{and} + \text{not} \rightarrow \text{nor}$ によって説明しようとするかぎり、*(iib) のような基底構造を仮定しなくてはならなくなる。

- (iii)a. They never forgive him for the insult, $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{and} \\ \text{but} \end{smallmatrix} \right\}$ *nor* could he rid himself of feelings of guilt for having spoken that way.
 (Quirk ed. al. 1972:565)
 b.. *They never forgive him for the insult, *and* $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{and} \\ \text{but} \end{smallmatrix} \right\}$ *not* he could rid himself of feelings of guilt for having spoken that way either.

- (7) Mary と domestic に強勢を置く。
 (8) 否定要素搬送変形 (NEG-transportation) のような規則を想定するしないに拘らず、この *do* によるささえは SCCに抵触する。

(9) SAI が循環的でないことは明白である。

- (i) a. Little did I dream that I should never see her again.
- b. *Little did I dream that never should I see her again.

SAI は非循環規則 (noncyclic rule) である。

(10) Wasow (1979) が (42) の仮定のもとで説明できない唯一の例として (i) をあげている。

- (i) John loves Mary although not Mary John.

(i) は空所化変形は従属節へは適用されないという Jackendoff (1971:22) への反例である点に注意。(ii) を参照。

- (ii) a. *Sam played tuba whenever Max sax.
- b. *John plays bagpipe despite the fact that Bill the contrabagotto d'amore.

参 考 書 目

- Anderson, S. and P. Kiparsky, eds. (1973), *Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Bresnan, J. (1971a), "Contraction and the Transformational Cycle in English," unpublished MIT paper.
- Bresnan, J. (1971b), "Note on the Notion 'Identity of Sense Anaphora'," *Linguistic Inquiry* 2, 589-597.
- Chomsky, N. (1973), "Conditions on Transformations," in Anderson and Kiparsky (1973).
- Grinder, J. and P. Postal (1971), "Missing Antecedents," *Linguistic Inquiry* 2, 269-312.
- Hankamer, J. (1971), *Constraints on Deletion*, unpublished doctoral dissertation, Yale University, New Haven, Connecticut.
- Jackendoff, R. (1971), "Gapping and Related Rules," *Linguistic Inquiry* 2, 21-35.

- King, H. (1970), "On Blocking the Rules for Contraction in English," *Linguistic Inquiry* 1, 134-136.
- Lakoff, G. (1968), "Pronouns and Reference," reproduced by the Indiana University Linguistic Club.
- Ota, A., eds. (1975), *Studies in English Linguistics* 3, Asahi Press, Tokyo.
- Postal, P. (1971), *Cross-over Phenomena*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- Postal, P. (1972), "Some Further Limitations of Interpretive Theories of Anaphora," *Linguistic Inquiry* 3, 349-371.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1972), *A Grammar of Contemporary English*, Longmans, London.
- Reibel, D. A. and S. A. Schane (1970), *Modern Studies in English*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.
- Ross, J. R. (1967), "On the Cyclic Nature of English Pronominalization," in Reibel and Schane (1970).
- Stillings, J. (1975), "The Formulation of Gapping in English as Evidence for Variable Types in Syntactic Transformations," *Linguistic Analysis* 1, 247-273.
- Terazu, N. (1975), "Coordinate Deletion, Gapping, and Right Node Raising," in Ota (1975).
- Wasow, T. (1979), *Anaphora in Generative Grammar*, E. Story-Socientia, Gent.
- 安井稔編 (1975), 『新言語学辞典 (改訂増補版)』研究社, 東京。